

## 巻頭言

大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科 学科主任

杉森 裕樹

2020年.

今年はいよいよオリンピック・パラリンピックイヤーである.

「多様性と調和」が基本コンセプトの一つである最大の国際交流イベントまであと170日を切った.

「人、もの、カネ (Bitcoin やリブラは注目だ), サービス, 情報が」...も世界を行き交う時代である. 昨年訪日外国人は215万人にのぼった. 少子化の日本でインバウンドの恩恵を実感しているのは私だけであるまい. 好むと好まざるとにかかわらず, 日本もグローバル化/ボーダーレスの時代に突入したと言って良いだろう.

光があれば影もある.

中国の湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス渦は国境を越えて, わが国でも3次感染が起きたと見られ, 発病した外国人の乗船が判明した大型クルーズ船では, 横浜港近くに停泊して3700人が入念な検疫を受けている.

このような光と影の両面が同時進行する不確実な時代には, やはり基本に立ち返るべきであろう.

ヒントがある. 昨年12月に不幸にして殺害されたペシャワール会の中村哲医師は, 「医は国境を越えて」(石風社) という本を出されている. 一言で言えば, 「困っている人がいれば(ボーダーレスに)人道的に支援する」ということであろう.

大東看護学ジャーナルも編集委員の方々のご尽力もあり, この第2巻が発刊の

運びとなった。

本学会員の中からも、国際的視野をもって「困っている人」に寄り添う看護師が一人でも活躍される弾みになるよう本誌が発展していくことを切に願ってやまない。

2020年（子年）2月